

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

大学授業「博物館実習」における国立民族学博物館
文化資源の複合的利活用と教育的効果：
主体的・探究的な「生きた学び」の萌芽

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2026-03-12 キーワード: 作成者: 岡田, 恵美, 松永, 亮太, 安見, 一葉 メールアドレス: 所属: 国立民族学博物館
URL	https://doi.org/10.15021/0002000385

第3章

大学授業「博物館実習」における国立民族学博物館 文化資源の複合的利活用と教育的効果

—主体的・探究的な「生きた学び」の萌芽—

岡田 恵美・松永 亮太・安見 一葉

(国立民族学博物館, 甲南女子大学, 国立民族学博物館)

本章では、2024年度に実施した甲南女子大学の授業「博物館実習」と国立民族学博物館（以下、民博）の社会連携事業検討ワーキンググループ（以下、社会連携WG）との協働教育プログラムを取り上げ、高等教育における民博文化資源の複合的利活用とその教育的効果について論じる。

民博は「大学共同利用機関」であり、民博が有するさまざまな文化資源を高等教育に還元し、大学教員や大学生・大学院生の教育・研究への利活用を促すことは自明の責務と言える。また2022年の博物館法の改正を経て、現行の博物館法では第3条（博物館の事業）第1項第11号に「学芸員その他の博物館の事業に従事する人材の養成及び研修を行うこと」と明文化された。しかしながら、民博は研究機関・教育機関・博物館と多機能な性格をもつがゆえに、大学等の学芸員養成教育における必修科目「博物館実習」の一部である「館園実習」については、機関として直接の受け入れはしていない。

こうした現状を鑑み、本章では、次の2点について論じる。第一に、民博の文化資源をいかに複合させて大学授業「博物館実習」に利活用可能か、その複合利活用による教育モデルを構築すること、第二に、その複合的利活用がどのような教育的効果を生むのか、これらを協働教育プログラムの検証を通じて明らかにする。本章第1節～第4節および小括は岡田が、第5節は甲南女子大学「博物館実習」の担当教員である松永が執筆した。

1. 大学との協働教育プログラムに至る経緯
2. 民博来館までの取り組み（Ⅰ 事前活動）
 - 2-1 受講生によるプレゼンテーションによるみんなの選定
 - 2-2 民博来館時のプログラム内容や学習のねらいに関する意見交換
 - 2-3 民博文化資源の複合的利活用に関する提案
3. 民博での協働教育プログラムの実施と考察（Ⅱ 来館時の活動）
 - 3-1 アクティビティ・カードを用いた展示観覧
 - 3-2 観覧での発見・疑問に関するグループ討論と発表

- 3-3 民博研究者による講義と学生との対話
- 4. 民博文化資源の複合的利活用による学びの効果（Ⅲ 事後活動）
 - 4-1 協働教育プログラムにおける2つの学習のねらいに関する検証
 - 4-2 みんなぱくを活用した「博物館実習展」と主体的・探究的な学びの萌芽
- 5. 大学教員の視点：博物館実習における民博文化資源の活用とその意義
小括：民博文化資源の複合的利活用と主体的・探究的な「生きた学び」

1. 大学との協働教育プログラムに至る経緯

大学等の学芸員養成課程は、「博物館法」第5条（学芸員の資格）第1項「文部科学省令で定める博物館に関する科目の単位を修得したもの」（一部抜粋）に基づくカリキュラムにより、「生涯学習概論」「博物館概論」「博物館経営論」「博物館資料論」「博物館資料保存論」「博物館展示論」「博物館情報・メディア論」「博物館教育論」「博物館実習」の9科目で構成される。中でも「博物館実習」は学芸員になるために必要な知識を既習した最終年度での履修が推奨され、「学内実習」や「館園実習」（博物館等における実務体験）を通して学芸員としての業務の理解や実践力を養うことが目標とされる。

今回、社会連携WGが連携した甲南女子大学では、「博物館実習」は3学部（文学部・国際学部・人間科学部）を横断し、学芸員資格の取得を目指す4年生が履修する通年科目である。2024年度に協働教育プログラムの実施に至った契機は、前年度の博物館実習展（2023年11月27日～12月1日）の視察であった。前年度授業の受講生17名と教員2名によって、甲南女子大学図書館の貴重書展示室で開催された博物館実習展では、民博の貸出用学習キット「みんなぱく」より「ソウルのこども時間」が教員によって選択され、展示資料として活用された（写真3-1）。

みんなぱくとは、教育普及を目的とした民博の文化資源の一つである。こどもが新しい世界と出会い、触れ合うための「小さな博物館」を意図し、世界の国・地域の衣装や生活道具などが解説カードとともに、一つのスーツケースに収められている。2025年8月現在、地域やテーマに沿って12種類が運用され、教育機関へ貸出している。甲南女子大学の2023年度「博物館実習」に貸出した「ソウルのこども時間」は、現在は内容を刷新した「韓国のこども時間：日常と伝統」として運用中である。みんなぱくを利用した担当教員からは、「大学博物館・資料館をもたない本学での博物館実習展の実施には、さまざまなハードルがあります。最も大きなハードルが資料の借用の問題です。実際に見て、触れることのできる『みんなぱく』を提供していただき、この問題を解決することができました」と感想¹⁾があった。

みんなぱくの貸出件数は、2023年度は小学校が70件、中学校が22件、高等学校が17件、大学が31件、その他（支援学校・看護学校・盲学校、国際交流協会等）50件と、例年、

小学校への貸出が最多であり、大学での利用については、近年30件前後にとどまっている。しかしながら、甲南女子大学のように博物館・資料館をもたない大学では、みんぱっくは「博物館実習」における資料の展示や資料の扱い方を実践的に学ぶ有効なツールとなる。したがって、こうした利用方法を高等教育機関に周知し、大学等でのさらなる利用促進を図ることは、民博としての課題でもある。



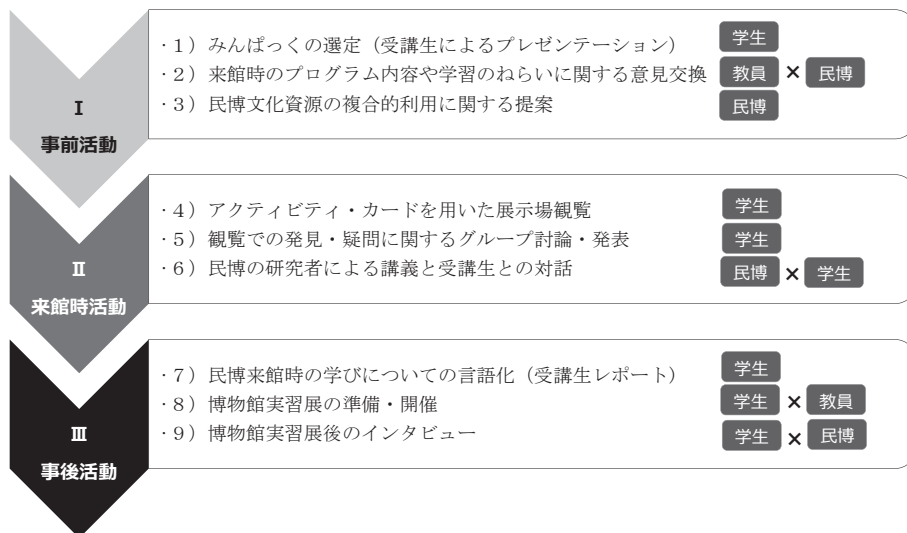
写真3-1 2023年度博物館実習展（甲南女子大学図書館・貴重書展示室 2023年12月2日）



資料3-1 2023年度博物館実習展で配布されたワークシート（松永亮太提供）

甲南女子大学の2023年度博物館実習展は、展示場所の制約からみんぱっくの選定やワークシート（資料3-1）の作成を教員が行ったものの、次年度においては、みんぱっくの選定や展示構成、解説パネルやポスターの作成等を全て受講生主体で進めたいとの担当教員の意向があった。同時に、博物館実習展の視察を終えた社会連携WGにおいても、「博物館実習」を通して民博が有する文化資源の複合的利活用から教育的効果について検証したいとの希望を伝え、両者の意向の下に2024年度の協働教育プログラムが萌芽した。

2024年度の甲南女子大学「博物館実習」と社会連携WGの連携による協働教育プログラムは、受講生・教員の民博への来館を中心として、図表3-1に時系列で示した「Ⅰ事前活動」「Ⅱ来館時活動」「Ⅲ事後活動」の3段階で構成した。次項以降において、各段階の活動内容やそこでの考察について、順に詳述する。



図表3-1 甲南女子大学との協働教育プログラムにおける3段階の活動
*右側は活動の主体者を示す (岡田作図)

2. 民博来館までの取り組み (I 事前活動)

2024年4月から甲南女子大学の2024年度通年科目「博物館実習」が始まり、授業担当教員より臨地授業として同年6月8日(土)に民博へ来館することが知らされた。本節では、以下の3つの事前活動について記す。

- 1) 受講生のプレゼンテーションによるみんなびっくの選定
- 2) 来館時のプログラム内容や学習のねらいに関する意見交換
- 3) 民博文化資源の複合的利用に関する社会連携WGから担当教員への提案

2-1 受講生のプレゼンテーションによるみんなびっくの選定

2024年度の「博物館実習」も、前年度同様に、博物館実習展の開催が授業目標として掲げられた。前年と異なる点として授業開始直後の4月時点で、受講生計14名が4チームに分かれて、12種類のみんぱっくから博物館実習展に適するものを、それぞれの資料を調査した上でプレゼンテーションを実施している。そして受講生による投票の結果、「世界のムスリムのくらし2：同時代を生きる」の使用が決まった。

同みんなびっくは、ムスリム女性に特有の頭髪を覆うさまざまなベールといった服飾品や女子小中学生の制服、ムスリム女性向けの化粧品、ファッション雑誌、ムスリム女子高生が主人公の漫画付き小説、ムスリム女性歌手の音楽CD、日常の祈りに関連する聖典『コーラン(クルアーン)』や祈りの回数を数える数珠、礼拝用敷物、ハラール製品や

ハラール食品、ボードゲーム等のムスリム向け知育玩具や教育絵本、非ムスリムに日本語でイスラームについて説明する小冊子や訪日ムスリム向けのパンフレット等、計40点で構成される。これら資料の収集地域は、日本、中国、ウズベキスタン、インドネシア、マレーシア、インド、パキスタン、イラン、ドイツ、イギリス、アメリカ、セネガルと12カ国にもおよぶ。みんぱっくには、こうした資料のほか、各資料の解説や研究者からのひとこと、使用法の写真等が掲載された「モノ情報カード」²⁾が同封されていることも特徴である。通常みんぱっくの貸出期間は2週間であるが、このモノ情報カードは民博のホームページ（以下、民博HP）からPDFでダウンロードが可能である。甲南女子大学の「博物館実習」においても、みんぱっくの選定に際し、受講生達はこうしたモノ情報カードによって同梱資料の内容やその詳細を確認した上でプレゼンテーションを行った。

このみんぱっく「世界のムスリムのくらし2：同時代を生きる」は、民博の山中由里子教授を筆頭として15名の研究者（博士課程学生含む）によって、2016年より2年間を費やして制作された。初年度は各研究者がフィールド調査時にムスリム関連のモノをそれぞれに収集した。その結果、収集地域は前述の12カ国となり、世界各地に広がっているさまざまなムスリムのくらしやイスラームの実践を資料から窺い知ることができる。制作2年目はスーツケースという限定された空間で、いかにして全ての資料を首尾一貫した理解容易な学習スキームに落とし込むかが検討された。山中は、その制作理念に関して、次の2つの重要な指摘をしている。第一に、このみんぱっくの目的が「同時代を生きる人」として、ムスリムへの親近感を育むことであり、第二に、過度に詳細なマニュアルを提示するのではなく、使用者が独自に授業やワークショップ、対話等へ発展可能なように、十分なヒントと情報を提供する点である。使用者は、年齢やクラスの規模や構成、学習者と指導者の背景知識等に合わせて利用することができる。また同時に、スーツケース内に散らばった積み木のような複数の資料に対し、例えば地理的な地域によって資料をグループ化する方法や、機能や形状によって資料をグループ化する方法など、使用者自身が順序や意味を見出さなければならないと指摘する（Yamanaka 2022: 192-196）。

2024年度「博物館実習」で、この「世界のムスリムのくらし2：同時代を生きる」についてプレゼンテーションを行った受講生は、その選定理由について次のように述べている。第一に、他のみんぱっくより、現代の日常生活に関する資料が多く、女性用の服や化粧品等、自分達にも身近に感じられるモノや可愛いものが多かったという。資料には、20歳前後の女子学生が興味・関心を寄せるような、ムスリム向け化粧品メーカーのリップグロス（アメリカ）や、厄除けの意味も併せもつアイライナー（パキスタン、インド）、ファッション雑誌（イラン、マレーシア、インドネシア）、アラビア語と英語で喋るクマのぬいぐるみ（イギリス）等が含まれている。そして第二の選定理由として、受講生自身にムスリムについての知識がほとんどなく、イスラームの信仰が世界各地に

分布していることへの新たな関心が関係しているという。日本においても理工系大学院を有する研究教育機関では、主にアフリカやアジア出身のムスリム留学生のために礼拝室が設けられている機関も少なくなく、滞日ムスリムの増加に伴い、モスクやイスラームセンター、ハラール食品の販売店等は各地に存在している。だが一方で、ムスリムとの直接の接点や交流がない場合は、一部のイスラーム原理主義者のイメージを滞日ムスリムに重ね合わせるような偏見や、宗教的戒律に極めて厳格であるというステレオタイプな固定概念が日本社会には少なからず存在する。言い換えれば、ムスリムやイスラームの実践への理解が進んでいない現状があり、多文化共生が叫ばれる一方で、モスクの建築問題や土葬墓地問題をはじめ、日本社会が増加傾向にある滞日ムスリムとどのように向き合っていくのか、その包摂性が問われている。前述の受講生は、同みんぱっくを選択したものの、ムスリムについての知識がない状態から、いかに最終的な展示まで手掛けられるのかという不安や、勝手な憶測で誤った情報を伝えてはいけないという緊張感もあったという。

2-2 民博来館時のプログラム内容や学習のねらいに関する意見交換

博物館実習展で用いるみんぱっくが決まり、民博への来館時（2024年6月8日）のプログラム内容やそこでの学びのねらいに関して、担当教員と社会連携WGで4月26日に意見交換を実施した。

みんぱっくを決定してから、受講生は資料の特性に基づいて、「A：いのり」「B：学習」「C：服」「D：日用品、メディア（雑誌）、コスメ、食品」の4グループに分類し、それぞれ興味のある資料グループに集まって調査を進めた。また、4つの資料グループとは別に、展示業務を「展示物（解説等）」「教育普及」「広報」の3チームで分担し、それぞれのチームに上記A～Dの資料グループメンバーがいずれも属している体制とした。来館時には、この3チームで活動することが担当教員から社会連携WGに知らされた。そして来館時のプログラム内容について意見交換を行い、次の3活動を設定した。第一に民博の常設展示の観覧、第二に観覧を通して生まれた発見や疑問についてのグループ討議と発表、第三に民博研究者による講義と学生との対話である。展示場の観覧に関しては、後述の「アクティビティ・カード」³⁾やワークシート「みんぱくを探検しよう！〈イスラーム編〉」⁴⁾の使用を提案し、学習のねらいについては、資料調査・テーマ理解として1)「ムスリムの暮らしに関する知識・理解を深める」、そして展示理解として2)「民博の展示方法について観察する」の2本柱とし、一方に偏向しないように担当教員から受講生への指示も行われた。社会連携WGも、この2つの学習のねらいに対応するディスカッション・シートを作成した。また民博研究者による講義は、当初はみんぱっくの筆頭製作者である山中に依頼をしたが日程が合わず、同制作メンバーの一人である民博の黒田賢治助教（当時）に依頼し、快諾いただいた。

2-3 民博文化資源の複合的利活用に関する提案

上記の打ち合わせを踏まえ、社会連携WGから担当教員へ、みんぱくの使用や展示場観覧のほかにも、事前・来館時・事後に複合的利活用が可能な、民博が有する文化資源について説明した。具体的には、以下に示すアクティビティ・カードやワークシート「みんぱくを探検しよう！〈イスラーム編〉」、また「標本資料目録データベース」等の所蔵資料に関する各種データベースや、所蔵図書に関するみんぱく図書室の蔵書検索、視聴覚資料の「みんぱく映像民族誌」や「ビデオテーク」の利用について、情報提供や一部提案を行った。

●「アクティビティ・カード」

民博でのアクティビティを提案する観覧支援ツールとして開発されたのが、「アクティビティ・カード」(資料3-2)である。「どのように見るのか選べる」「何を見るのか選べる」「物を見て、考える力を伸ばす」「なんどでも楽しめる」をコンセプトとし、アクティビティによって見方や考え方を体験するため、自身が実際に見たものやそこで考えたことが重要で、正解や模範解答はない。解答のある課題をこなすものではないという性質上、一度体験したアクティビティでも展示資料と一緒に観覧する人が変わることでも何度でも利用でき、繰り返しの利用で学習体験の蓄積や振り返りが可能になる。カードは8種類あり、シンプルな問いから構成されたアクティビティが、A5サイズの片面1枚で完結する構成である。一つの展示資料を詳細に観察するカード、同級生や家族との対話を通じて新たな発見を促すカード、観たものや感じたことをつぶさにメモするカード、見る方法を提案するカード、自らのくらしと比較して文化の違いや多様性を考えるカード、



資料3-2 民博が開発した8種類のアクティビティ・カード

展示資料の構造や素材から使用者について想像するカードなど、見方と合わせた考え方を提案している。

甲南女子大学が展示場観覧時に使用するツールとして、事前の打ち合わせ時に「これは、なに？」(資料3-2の左上)という観察に焦点化したカードを大学教員へ提案した。各自が興味をもった展示資料に対して、スケッチをする行為によって細部の意匠や構造までを観察でき、視覚的に得た情報を文字で記述する行為によって整理し、そこからさらに感じ思ったことを言語化する。「どこを見て、そう思った？」という問いは、美術館での対話型鑑賞法に依拠し、自らの考えを振り返りながら客観的に分析すると同時に、その根拠を言語化することで鑑賞者をより深い学びへと繋げる工夫がなされている。

●ワークシート「みんなくを探検しよう！〈イスラーム編〉」

アクティビティ・カードと同様に、民博が考案したこども対象の観覧支援ツールとして、「みんなくを探検しよう！〈イスラーム編〉」(資料3-3)がある。これは前述の山中を筆頭に作成され、イスラーム理解を深めることに特化した多機能型ワークシートである。そこでは、イスラームの関連資料が「祈り」「教育」「身だしなみ」「飲食」の4テーマに分類されている。民博の本館展示場のさまざまな場所に点在するイスラーム関連資料の在処を示した展示場マップの機能や、展示資料の解説や観覧のヒント、記述式の設問を含むワークシートの機能、さらに探究する場合の民博のコンテンツやその使用法といった情報機能と、多機能で複合した内容構成である。このワークシートの最大の特徴は、イスラームに関するより詳細な情報を掲載した「解説版冊子」を付属している点である。解説版の冒頭ではイスラームや民博の関連展示物について、次のように説明している。

イスラーム(イスラム教)は、ユダヤ教、キリスト教に次いで西アジア(中東)に誕生した一神教です。唯一神アッラーから預言者モハンマド(西暦632年没)に啓示された教えを信仰します。「イスラーム」とはアラビア語で「神に従うこと」を意味し、イスラム教徒は「ムスリム」と呼ばれます。イスラームは、軍事活動や交易、スーフィー(神秘主義者)による布教などによって、アラビア半島から世界に広がりました。

当館の西アジア展示場の「信仰」のセクションには、聖典『コーラン(クルアーン)』、聖地メッカのカアバ神殿にかけられていた幕キスワ、メッカの方角(祈りの方向)を定めるキブラ・コンパス、礼拝用絨毯、数珠、護符、女性用の衣装など、ムスリムの信仰の中心となるモノが展示されています。まずはアラビア文字、祈りの作法、身だしなみと信仰心、巡礼などに関わるこれらの資料と解説を踏まえた上で、西アジア展示場以外の展示場をまわって、世界各地に住むムスリムの生活と信仰に関わるモノを探してみてください。アラビア語で書かれた『コーラン』、聖地メッカに向かって行う礼拝、女性用のベール、食べ物に関する戒律など、世界中のムスリムが共有する要素が浮かび上がりますが、それぞれの土地に根ざしたイスラームのあり方もまた見えてきます。(山中由里子)

この解説版は、学校教員や保護者がこどもからの質問に回答したり、対話をしたりしながら一緒に学習可能な構成であり、各展示資料に関する解説のほか、Q&Aや参考資料集も記載されている。そのため甲南女子大学との協働教育プログラムにおいても、来館前の事前学習や来館時の観覧での使用を提案した。



資料3-3 ワークシート「みんなばくを探検しよう! <イスラーム編>」

●「標本資料目録データベース」等の各種データベース、所蔵図書に関する情報検索

実際に民博に来館することなく、民博が収蔵する標本資料（展示・非展示含む）や所蔵図書についての情報を得ることは可能である。『国立民族学博物館 展示案内』のような紙媒体のほか、所蔵資料については「標本資料目録データベース」「標本資料詳細情報データベース」「標本資料記事索引データベース」や各種テーマ別データベースから、また所蔵図書は「みんなばく図書室」のOPACから、いずれもオンラインで検索ができる。しかしながら、民博の情報検索システムには課題も少なくない。例えば、甲南女子大学の展示のテーマに沿って、「標本資料目録データベース」の簡易検索ページで「ムスリム」と入力した場合は89点の資料、「イスラーム」の入力では209点しか表示されない。一方「イスラム」と入力した場合は2,031点が表示され、その収集国は日本、中国、タイ、マレーシア、フィリピン、シンガポール、カザフスタン、インド、アフガニスタン、オマーン、エジプト、トルコ、フランス、ニジェール、カメルーン、セネガル、モザンビークと広範にわたる。すなわち同データベースでの文字検索の場合には、標本資料名に検索語の文字列が含まれるかどうか、検索の精度を大きく左右する。だが、我々の日常生活では20年以上も前から商品購入サイトを始めたさまざまな情報検索の場面において、検索語の関連語や同義語が抽出されるシソーラスや、さまざまな履歴を踏ま

えて提案を行うような機械学習のアルゴリズムは、もはや標準的な機能になっている。そうした感覚からすると、民博の同データベースでの文字検索は、上記の「イスラーム」「イスラム」のような長母音と短母音の表記の差異ですら同義語と見なされず、網羅的な情報検索や関連情報を横断的に取得可能なシステムとは、残念ながら言い難い現状がある。

こうした情報検索の問題は、所蔵資料の分類や属性付与の問題とも関連する。民博が所蔵する膨大な標本資料や図書は、HRAF（フラーフ）協会の2種類の分類コード、「文化項目分類」OCM（Outline of Cultural Materials）と「地域・民族分類」OWC（Outline of World Cultures）によって分類され、属性が付けられてきた。1949年に開始した、このHRAF協会（Human Relations Area Files Inc.）は、米イェール大学に本部を置く大学等研究機関が加盟する非営利組織で、膨大な民族誌資料を独自の分類法を用いて体系化し、加盟の研究機関

78	宗教的慣行
781	宗教体験
782	慰撫
783	浄化と贖罪
784	忌避とタブー
785	禁欲主義
786	オージー（乱痴気騒ぎ）
787	啓示と占い
788	儀礼
789	呪術

図表3-2 OCM分類の一例
（国立民族学博物館 1988）

に提供してきた。民博は1976年4月に正会員として認められ、民博の情報検索システムの構築において、HRAF協会が開発・活用してきたOCMとOWCが採用された。OCMは日本語版も1988年に刊行されている（松澤 2006: 349-352）。

事実、前述の「標本資料目録データベース」の詳細検索ページでは、その検索項目として9項目が表示され、その中にOCMとOWCも含まれる。OCMは主題分類であり、あらゆる文化やその背景となる情報を10～88の二桁の数字で79に大区分し、さらに3桁目には1～9の数字を追加して小項目に分けた分類体系である（国立民族学博物館編 1988: 14）。例えば「78 宗教的慣行」は、図表3-2で示すように下位分類される。

一方、OWCは世界を8地域（A：アジア、E：ヨーロッパ、F：アフリカ、M：中東、N：北アメリカ、O：オセアニア、R：ロシア、S：南アメリカ）と世界全体（W：世界全体）に大分類し、アルファベットで示す。つづくアルファベットはさらに地域で細分類し、最後に数字で各地域の文化や社会の特色を考慮しながら、地域別、民族別あるいは時代別に細分して記す（稲葉 2008: 66-67）。みんなく図書室の図書は、国内図書館で最も採用されている日本十進分類法（NDC）ではなく、こうしたHRAFのOWCの応用により地域別・民族別に配架されているのが特徴である（ただし雑誌はタイトル順の配架である）。

シソーラスに関して、民博の元機関研究員であった文化人類学者の岩谷洋史らは、民博の本館展示観覧においてOCMとOWCを有効活用し、来館者が関心をもった展示資料に対して、展示場内の関連資料といった付随の情報リソースを電子ガイドで提示する可能性を示唆し、来館者の関心に呼応するような情報提供が期待できるのではないかと

指摘している（岩谷・本村 2019: 191-196）。だが、OWCは現在も標本資料に付与されているものの、2000年以降に収集した資料にはOCMが付与されていない資料も多く、ネットワーク型の情報検索や横断的な情報提供に至る道は険しいと言わざるを得ない。

以上のようなデータベースの使用における難しさもあってか、甲南女子大学の受講生14名を対象とした来館後のアンケート調査結果においても、13名の回答中、民博の「標本資料目録データベース」については10名が知っていると回答したものの、実際に来館する前の事前活動で活用したと回答したのは2名にとどまった。

●視聴覚資料「みんぱく映像民族誌」や「ビデオテーク」の視聴

来館することなく利用可能な視聴覚資料として、民博では研究や教育目的の試聴用として、2010年より「みんぱく映像民族誌」DVDシリーズを製作し、全国約520の大学・研究機関や国公立図書館等に配付している⁵⁾。また「ビデオテーク」は主に民博で制作された、世界各地の人びとの生活や儀礼、芸能について映像やマルチメディアで紹介するシステムである。映像・音響資料を合わせると約7万点になり、600番組を超えるビデオテークは教育・研究利用において民博の民族学資料共同利用窓口を通して貸出が可能であり⁶⁾、一部はストーリーミング配信もされている。

甲南女子大学の担当教員にも、事前にムスリムやイスラームの実践と関連する視聴覚資料として、みんぱく映像民族誌では「第1集 伝統をつなぐ中東世界」や「第28集 中国雲南省大理盆地の回族」、ビデオテークでは「イスラームの断食」（番組番号1055）、「イスラーム教の礼拝と巡礼」（番組番号1318）、「礼拝用の敷物ジールー」（番組番号1637）、「回族の結婚式」（番組番号1726）、「アラビア書道家」（番組番号1751）等があることを伝えた。

3. 民博での協働教育プログラムの実施と考察（Ⅱ 来館時の活動）

本節では、甲南女子大学の「博物館実習」受講者が民博に来館した際に実施した協働教育プログラムより、次の3つの活動について詳述する。

- 4) アクティビティ・カードを用いた展示観覧
- 5) 観覧での発見・疑問に関するグループ討論と発表
- 6) 民博研究者の講義内容と学生との対話

当初の予定通り、臨地授業の一環として2024年6月8日（土）に受講生14名と松永亮太教員が来館した。受講生対象アンケート調査の中で、民博への来館頻度をたずねる設問では、13名の回答中、「2～3年に1度」の選択者が9名、「年に1回」が4名であり、

初めての来館者はいなかった。

プログラム冒頭で、社会連携WGより民博についての概要説明を行った。文化人類学・民族学やその関連分野の大学共同利用機関として1974年に大阪万博の跡地に創設されたことや、博物館が1977年に開館し、創設に尽力した梅棹忠夫が初代館長を務めたこと、研究機関としての機能や総合研究大学院大学を付設する教育機関としての機能、また34万点を超える世界最大の民族学コレクションをもつ博物館としての機能について概説した。常設展示場に関しては、12の地域展示と言語・音楽の通文化展示で構成され、研究者が収集した世界のさまざまな資料の大部分が露出展示されていることにも言及した。受講生に展示場を歩いた時の総距離について質問すると、約5kmという事実に驚く様子もみられた。

次に「大学生のみんぱく活用術」をテーマに、前述の「標本資料目録データベース」を含む各種データベースの活用や、常設展示場や過去の企画展・特別展を3D画像で見ることができるバーチャルミュージアムについても紹介した。民博は大学共同利用機関であり、こうしたオンライン利用が可能なさまざまな文化資源を大学の教育や研究に活用してもらうため、コンテンツ等の一覧表も作成して配布した。

また学芸員の資格取得を目指す受講生が対象のため、民博の社会連携事業の一環として「博物館とこども」というオンライントーク・シリーズを国内の博物館・美術館と連携して主催していることや、社会連携WGが主体となって開発した「アクティビティ・カード」の開発経緯やアウトリーチ・プログラムの企画・実施についても言及した。その上で、社会連携活動の詳細は、民博HP「学校教育」ページから閲覧可能なことを投影画面上で示した。

3-1 アクティビティ・カードを用いた展示観覧

民博での展示観覧が、受講生にとって主体的な活動になるように、アクティビティ・カード「これは、なに？」を一人に一枚配布し、受講生たちは前述の展示物（解説等）・教育普及・広報の3グループに分かれて、常設展示場を自由に1時間ほど観覧した。

14名が記入したアクティビティ・カードでは、ムスリム関連の展示資料に注目した受講者が多く、礼拝用敷物（携帯用、中国雲南省）、読経用敷物（中国・新疆ウイグル自治区）、涙壺（イラン）、邪視除けのお守り（モロッコまたはチュニジア）、邪視除けのお守り（エジプト）、『コーラン』（エジプト）、『コーラン』女人の章85節（中国）、お守り（カザフスタン）、手洗い用水差し（カザフスタン）があった。その他に、ヤマラージャ像（チベット自治区）、コプト教十字架（エジプト）、ゾロアスター教の牛頭の錫杖（イラン）があり、ムスリム関連ではないものの、宗教や信仰に関する資料に着目していることが窺えた。ここでは、受講生を代表して発表した3名のカードとその発表内容を紹介する（資料3-4、資料3-5、資料3-6）。

展示場「東アジア展示・中国地域の文化」には、中国雲南省大理市で収集した旅行用敷物（H0268234）が展示されている。これに着目した受講生Aは、敷物と合わせてその収納用鞆も素描している。これはムスリムの回族が使う礼拝用敷物で、収納鞆には肩掛用ストラップも付属している（資料3-4）。その隣にはアラビア文字が色鮮やかに刺繍された、新疆ウイグル自治区の読経用敷物（H0180333）が並べて展示されているため、受講生は展示資料名を隣の資料と混同したようである。受講生は回族のこの敷物の製法や絵柄についての疑問や、携帯用鞆の大きさについても疑問を記している。さらに、もち歩きの不便さを想像した上で、「ユニクロのウルトラライトダウンくらい小さくしてあげたい」という思いから、アパレルの大手企業が宗教に参入しないのはなぜか、という新たな疑問を、発表時に次のように他の受講生に投げかけていた。

「読経用敷物の何て言うんだらう？新疆ウイグル自治区のやつです。カバンがめっちゃでかくて、普段持ち歩いている財布とか全部ひっくるめた大きさと同じぐらいやから、敷物も持ち歩かなあかんのが大変そうやなと思って。ユニクロのウルトラライトダウンくらい小さくできないかな。なんか不便そうやなと思ったんだけど。なんかアパレルの大手は宗教に参入しづらいのかなって思いました。」

因みに、みんぱっく「世界のムスリムのくらし2：同時代を生きる」にはマレーシアで販売するユニクロ製のエアリズムのベール（ヒジャブ）が含まれ、受講生たちの最終的な博物館実習展でも展示されることになる。

次に、受講生Bは、西アジア展示場にあるイランの涙壺（H0224132）に着目した（資料3-5）。これは「標本資料詳細情報データベース」の情報に依拠すれば、食事などの際に手を洗うバラ水を入れる容器で1950～1960年に製作され、製作者名も明記されている。民博の『展示案内』にも詳細が記されている（国立民族学博物館編 2017: 57）。展示場の解説パネルには「シーア派の哀悼行事の際に、アリーの息子ホセイとその一族のために参列者が流した涙は病気を治す霊薬となると信じられ、涙壺に溜められた。1930年代初めの近代化政策の中で殉教劇が一時禁止されるとその用途は忘れられ、バラ水容器や装飾品として使われた。」と記されている。この受講生Bは「涙っぽさ」「ねじれ」「青のグラデーション」と形状や色を観察した上で、シーア派の哀悼行事の参列者の涙を集めた容器と伝えられているが、1930年代の近代化政策の中で殉教劇が一時禁止された事実に触れ、文化的・宗教的に重要なものが政策によって忘れ去られることに衝撃を受け、その国の人々は独特な形にもかかわらずその用途をなぜ疑わなかったのかと、強い疑問を抱いたことがわかる。

「イランのカーシャーンという地域の資料です。そのもの自体がすごく青色の雫型みたいな形をしていて、涙を溜めるものなんていうかちょっと。説明文を読むと、『シーア派の追悼行

事の際に、アリーの息子ホセイとその一族のために参列者が流した涙は病気を治す霊薬になると信じられ、涙壺に溜められた。1930年代初めの近代化政策の中で、殉教劇が一時禁止されるとその用途は忘れられ、水入れや装飾品として使われた』っていうふうに書いてあって、宗教的なものなのに一時期近代化政策で禁止されて、その用途自体が忘れ去られたっていうのが、私的にはすごく衝撃的で、文化的とか宗教的に重要そうなものに、一時の政策で忘れ去れることができるものなのかなっていうふうに思ったのと、形がすごく特徴的なので、その用途を疑わなかったのかなとすごく疑問に思いました。」

受講生Cは、同じく西アジア展示場にある、モロッコやチュニジアの邪視除けのお守り(H0127109)に注目した(資料3-6)。これは1890~1920年頃に制作され、「ファーティマの手」という別称もある。「信仰の道具」のセクションに、小型の『コーラン』や数珠、メッカの方角を知るためのコンパス等と一緒に並べて展示されている。受講生は手に似ているが手には意味があるのか、またその用途や使用場所についても最初に疑問を抱いている。「怖」という語とともに、三巴と二巴の違いに着目してその意味についての疑問や、標本資料名の日本語表記「邪視除け」と英語表記「evil eye」の違いから、視線を移すのか、見られないようになるのか、見ることは良くないのか、と新たな疑問が次々と発露していることが窺える。

「西アジアのモロッコとチュニジアっていう地域にある、邪視除けのお守り、英語で Evil eye charm って書いてあったので、多分、上の方に紐を通して、とりあえずこれで、ぶらんってなるものなんだろうなっていうふうに思いました。これを見つけて、なんでこれ選んだかっていうと、初め見た瞬間に全部白黒なのかわかんないんですけど、(中略)赤い丸のところを囲んであるのがオレンジ色ですごく怖いと思って、(アクティビティ・カードの)『はじめに思ったこと』に〈怖〉って書いてあるんですよ。だからすごく怖いなと思って。色々見てみるかと思った時に、結構丸が目立つなと思って、色々本当に思ったこと考えたことっていうのか、ほとんど疑問なんですけど、やっぱり疑問が出てくる作品だなって。例えば、ほとんど丸は三つ巴なんですけど、付け根の方のところだけ二つ巴っていうんですか? 勾玉が二つくる紋様のような、こういう感じになっていて、その三つ巴と二つ巴の文様はなんだろうとか。あと、日本語で邪視除けお守りって書いてあるんですけど、でもあの英語読んでいたら Evil eye charm みたいな『除け』じゃないんですよ。だからあの Evil eye って丸々普通の単語があるのかと思って調べてみたら『脅威』みたいなので、脅威って何かなっていうふうに見てみたら、見ることで(中略)こっちがバリアを張るんじゃなくて、こっちから強眼をつけているから、最終的に結果的に避けられる状態になるのかっていう。はい、考察できることをしてみました。」

このように、関心や疑問をもった展示資料を素描して細部まで観察し、解説パネルから得た情報も併せて文字で整理することによって、さまざまな疑問が個々で現れている。そしてその答えを導き出そうとする過程で新たな疑問が創出されていることが、言語化されたカードから窺い知れた。このアクティビティ・カードは主に小学生を想定して開発された観覧支援ツールではあるものの、大学生にも有効であることがわかる。ただし

大学生の場合は、観覧時に発露した疑問をさらに事後学習において探究するために、着目した資料の標本番号を記入するように事前に指示を行うべきであった。観覧当日は展示場にて一部の受講生には、社会連携WGのメンバーより助言を行ったが、全受講生には行きわたらなかった。標本番号によって、前述の「標本資料目録データベース」や「標本資料詳細データベース」の活用へと繋げることが可能であり、この点は課題として今後留意が必要と言えよう。

3-2 観覧での発見・疑問に関するグループ討論と発表

展示観覧について受講生3名が発表した後、前述の3チームに分かれて議論を行った。担当教員との打ち合わせ後に社会連携WGが作成したディスカッション・シートに沿って、各グループは2つの学習のねらいである、1)「ムスリムの暮らしに関する知識・理解を深める」、2)「民博の展示方法について観察する」から、「気づき・興味をもったこと」「調べてみたいこと」「疑問に思ったこと」について20分程度かけて話し合った。昼食時間を経た後、展示チーム、教育普及チーム、広報チームの順にその内容について次のような発表があった。

【展示チーム】

「(ムスリムの暮らしについて) 私たち、身近のモノが多いなというふうに感じました。例えば、コアラのマーチのお菓子があつたりとか、CDとかDVDがあつて意外にメディア系がすごい発達しているなっていうイメージを持ちました。宗教心が強いな感じたり、世界中にイスラーム教があるなっていうふうに感じていて、最後の方、地図見た時に、でもオーストラリアとか日本にはあんまり無いなっていうところとか、教えてもらうまで気づかないので、すごい溶け込んでいて、他の宗教と似ているなっていうふうに気づきました。調べないといけないことは、『コーラン』とかはすごい沢山あるイメージがあつたんですけど小説とか、新書とかがあんまり無かつたので、そこら辺はどんな感じなのかなということ、調べてみたいなっていうふうに思っております。

疑問に思ったことが2点あつて、1つ目がヘビーローテーションのCDがあつたんですけど、肌見えているけど大丈夫なのかなっていうのが一番疑問に思いました。2つ目が『コーラン』に女人の章85節っていう、小説で形式なんかあるんですけど、文字らしく見えなくて、何を書いているんだろうっていうふうに思いました。世界中にイスラーム教があると言つたんですけど、日本にはなかつたようで、一つの大きい大陸なのに一つの国だけ無いみたいなのところがあつたので、なんでそこだけ無いんだろうっていうふうに思いました。

博物館の展示については、私たちにはあんまり親しみがないから、キャプションで文字を見て興味を持ったら、ちっちゃく下の方に書いてある、数字をデータベースで調べられるっていうのを聞いて、興味を示しました。調べてみたいことは、雑誌がいっぱいあつたので、それはどのように展示されているのか調べていきたいなというふうに思っています。疑問に思ったことは、メイクされているマネキンは、その国のメイクがされているのかっていうのを思いました。」

【教育普及チーム】

「ムスリムの暮らしについて、気づきや興味を持つこととしては、あのまず荷物が多くて大変そうだなってところと、小さいお守りだとなくしそうだなってというのがあったのと、あと数珠の種類がかなり沢山あって、他にもベールを被っているから日傘はいらないのかなっていう。お祈りをする際に、こう手を洗う道具だったので、その手を洗う習慣っていうのは、日本の神社と似ているなって思ったのと、その絨毯一つにしても、一つ一つ手が込んでいて、結構長く使えそうだなという印象がありました。日本だったら結構ハラール食品が少ないから、ハラール食品が三食同じになりそうだなっていうのが、ずっと思いました。

調べてみたいこととしては、ムスリムの人の一日でどういうふうに行動しているのかっていうことや、その礼拝とか、お祈りをする際の礼儀作法であったり、そういったこともいつから学ぶのか？子供の頃から教わるのかっていうのと、その習慣とか手順を知りたいなと思いました。疑問に思ったことは、あの礼拝用敷物、結構分厚いし、すごい大きかったんで、洗濯をどうやってするのかなというのと、調味料もハラール表示を見るのかということと、あと結構その絨毯が大きかったので一人でその全部広げて使うのか、畳んでこうして使うのかっていう使い方の部分だったり、その絨毯に刺繍が付いているものもあったので、手作りであるのか？ということを知りたいと思いました。

展示について気づいたこととしては、吊るす方が多くて見やすかったなっていうのと、展示の距離がすごい近かったのが気づきでありました。小物とかはそういう小物で固まっていたり、順路は絨毯で並んで固まったり、そのブースが分けられていると思ったのと、資料ごとの距離も結構近かったのがありました。展示で調べてみたいこととしては、高いところの吊るされているやつとかは、どういうふうに関人ぐらいで展示するのかっていうことであったり、そのテグスが有るのと無いのがあったので、その違いだったり、その絨毯であればその四つの角を留めて吊るしているのか、どうやっているのかっていう部分で、負荷の掛からない展示の仕方はあるのかなっていうふうに思いました。

疑問に思ったこととしては、調べてみたいことを感じたんですけど、何人で展示するのかと配置をどうやって決めるのかと、食品については食品だけ並べるのか、カゴに入れているのか、食品だけこう並べずにカゴの中に結構固まって入っていたのはなぜなのかなっていうのがありました。ハラールの印を見えにくかったものとかもあったので、それがなんでまとまったのかなっていうのが疑問に思いました。」

【広報チーム】

「ムスリムの暮らしについての気づきや興味を持ったことは、まずその生活に宗教がすごく身近にあるなっていうふうにしたところと、すごく色がカラフルな資料が多かったなと思うのと、あとその模様が丸い模様が多いっていうのと曲線の模様が多くなったないうところもありました。あとはアクセもなんかごつついものが多いないうのがありました。あとは、そのイスラム教の「目の力」というか、目に対する、なんていうか、思いみたいのがすごく強くなっているふうに感じて、仏教とかと比べてときに、仏教はその仏像とかはアルカイック・スマイルみたいなすごく顔が薄かったり、目の薄いような印象もあるし、日本の文化的にも目上の人に対して目を合わせないみたいな、なんかそういった文化があるのに対して、そのイスラム教はその邪視というか、目に対するちょっと強いように感じて、仏教は弱いような思いがすごく多くて、そういった違いがあって面白いないうのと、あとはそのすごく目力が強いものが多かったんで、それはその人種的な違いもあるのかないうふうに思いました。

調べてみたいこととしては、宗教の行事に関するニュアンスがすごく気になるなって思いで、日本みたいに初詣だったりとか、何かそういったように、すごくメジャーではない宗教行事になるのか、それともその限られた何か宗派によるあまりメジャーではない宗教行事になるのか、そういったところがすごく調べてみたいなっていうふうには思いました。疑問に思ったこととしては、マレーシアやインドネシアも、もうイスラーム化が進んでいるってそのキャプションを見て、元々イスラーム、ムスリムの国ではなかったのに、どうしてそのイスラーム化が進んでいったのかってところはすごく疑問とあって、またそのイスラーム化によってイスラーム色の強いものを好んでいく傾向があるっていうふうにも見て、そのなんだろう、流行りのものというか、面白いな。なんか面白いなみたいところは、元々そのカラフルなものが多いのはなぜなのだろうっていう疑問にあって、元々色に対する意味があったのか、そのファッション性の部分で色を強調するようになったのか、ってところはすごく疑問に思いました。

次、博物館展示についてなんですけど、気づきや興味を持ったことは、絨毯を壁のように展示してあるところが、なんかすごく美術館の作品を見せるときのインスタレーションみたいな感じですごくいいなっていう風に思ったのと、あとはちょっと浮かせるような点、工夫された展示もあって、その模様を見せるためにそれぞれ工夫されているのかなってところは感じました。マネキンがすごく動きのある展示が多くて、生活感っていうのがすごく感じられるなっていう風に思ったのと、あとはマネキン一つ一つの向きが違うところもあって、その導線を考えられた配置になっているのかなっていうふうに感じました。また、ボールの展示なんですけど、元々ヘッドマネキンだけしかないのかなっていうふうに思ってたんですけど、その頭の装飾をする時に透明の筒みたいなものの上に頭の装飾のものを飾った展示があったので、こういったその装飾の展示の仕方もあるんだっていうふうに、ちょっと面白いとは思いました。あと調べてみたいこととしては、そのボールの巻き方の違いがすごくマネキンごと違ったので、その巻き方の違いに意味はあるのかって、そういったところも調べてみたいなと思いました。

疑問に思ったこととしては、その資料の背景がすごく黒のものが多くて、それが何でだろうっていうふうにしたのと、やっぱりそのカラフルな資料が多かったんで、そのカラフルなものが映えるように黒なかなっていうふうにしたんですけど、美術館とかだとホワイトキューブっていうように、その真っ白な空間で展示することもあるので、それとまた違った意味合いがあるのか、ちょっと疑問に思いました。」

3 チームの発表を通して、学習の柱の一つであったムスリムの暮らしについての感想や疑問は、第一に「宗教・信仰実践」、第二に「ムスリムに関連するモノ」に区分することが可能である。イスラームやその信仰の実践に関しては、信仰心が強く、生活と宗教が密接であることや、イスラームが世界中に存在しているものの溶け込んでいて気づかなかったといった感想のほか、自らの文化・風習と比較しながら、仏教と比べてイスラーム教は邪視など目に対する力や思いが強いといった発見や、礼拝で手を清める行為を日本の神社とも類似していると捉える受講生もいた。調べてみたいこととして、ムスリムの人びとの一日の行動や礼拝手順、また礼拝方法を学習する時期、宗教行事の詳細などが挙げられた。展示観覧を通して湧き上がった疑問として、東南アジアのマレーシアやインドネシアでイスラーム化が進んだのはなぜか、その一方で日本やオーストラリアでは

なぜイスラームが拡大しなかったのか、またイスラーム化するとなぜイスラーム色が厳格な方向に進むのかといったさまざまな角度からの問いの発露が見受けられた。

他方、ムスリム関連資料についての発見や感想として、携帯用敷物など荷物が多くて不便な印象、多種多様な数珠が存在する、絨毯は一つ一つ精巧で長年使用できそう、多色で丸や曲線で描かれた資料が多い、『コーラン』女人の章85節を書いた掛け軸（アラビア書道作品）は文字には見えない、お菓子やCD、DVDといったメディアなど、自分たちにも身近なモノが多いといった発言があった。また自身の暮らしと比較することで、ベールを被るから日傘が必要ない、日本ではハラール食品が少ないため3食同じ料理になりそうといった感想も挙げた。疑問や調べてみたいこととして、音楽CDジャケットで見た肌の露出に対して許されるのかと疑問にもった受講生や、雑誌の展示が多い反面、小説や新書の存在の有無やその内容についての疑問や、カラフルなモノが多いのは元々各色に対する意味があったのかあるいはファッション性から色を強調するようになったのか、調味料にもハラール表示が必要なのか、など多岐にわたった。

学習のもう一つの柱である博物館展示についての感想や疑問は、以下の通りである。展示全般に関する事項では、解説文は極力少なく専門用語があまり使用されていない点、宗教など馴染みのない資料は解説文の文字を追ってから資料に視線を移す傾向にある点、展示キャプションの下部に標本番号が小さく記載され、興味をもてばデータベースで検索が可能な点、資料間の距離が近く、小物は小物で固めて展示してある点、マネキンに動きがあって生活感を感じさせる点などの指摘があった。さらに美術館に多いホワイトキューブ（白色の展示空間）とは逆に、民博展示場の壁が黒色なのは資料の色を強調させるためなのかなどの問いも挙げた。

受講生の多くは、西アジア展示場で比較的長い時間を費やしたため（写真3-2）、サウジアラビアのキスワ（カアバ神殿の垂れ幕 K0006982）やその展示方法にも関心を寄せた。キスワについて、受講生に配布した前述の「みんなくを探検しよう！〈イスラーム編〉解説版」では次のように紹介されている。

世界中のムスリムにとって、聖地メッカへの巡礼は生涯の願いでもあり、大切なつとめでもあります。メッカにあるカアバ神殿には、キスワとよばれる黒い幕がかけてあります。キスワは毎年、新しいものとりかえられます。黒字の布には金糸でイスラームの聖典『コーラン』の章句が刺繍されています。当館の西アジア展示場には、西暦1970年に開かれた大阪万国博覧会の際にサウジアラビア政府より寄贈されたキスワがあります。古いキスワは小さく切断され、巡礼に来た人びとに配られることになっていますから、当館に展示してあるような大きなキスワはたいそうめずらしく、貴重な資料となっています。（西尾哲夫）

キスワの展示方法に関して、絨毯を吊るす展示が美術館の作品展示のようで模様もよく見える、高い位置にあるため目線が上について吊るした方が見やすい、高い場所の展

示は展示配置をどのように決め、作業には何人が必要で、資料に負荷のかからない展示はどのような方法かと疑問をもつ受講生も多かった。そのほか、ベールの展示方法についての感想も多数あった。受講生が博物館実習展で使用予定の「世界のイスラムの暮らし2：同時代を生きる」には、イスラム女性用のチャドルやヒジャーブといったさまざまなベールが10点以上同梱され、その収集国は中国、インドネシア、マレーシア、イラン、パキスタン、セネガルで着用方法も多様である。事前にモノ情報カードからベールに関心を持ち、民博での展示方法を観察した受講生（写真3-3）からは、ヘッドマネキンではなく一部は透明の筒を使用した展示であった点や、ベールの巻き方やその違いにどのような意味があるのか、化粧が施されているマネキンにはその国のメイク法がなされているのかなどが挙げられた。さらには食品や雑誌の展示方法への関心も高く、テグスを使用した展示やその使用有無の判断、食品をカゴに入れて配置する理由（ハラールの印が見えにくかったと話す）といった、受講生達の主体的な探究の姿勢や意欲が発表から伝わってきた。



写真3-2 西アジア展示のキスワの前で信仰の道具を観覧する様子（国立民族学博物館 2024年6月8日）



写真3-3 東南アジア展示でベールの被り方や壁面展示を観覧する様子（国立民族学博物館 2024年6月8日）

3-3 民博研究者による講義と学生との対話

民博でのアクティビティ・カードを用いた展示観覧や、それを踏まえたグループ討論・発表を経た後、民博所属の中東地域研究を専門とする黒田賢治助教による30分程の講義と、講義内容の質疑応答を含む受講生との対話のプログラムを実施した（写真3-4）。

「現代のイスラムの暮らし」と題された講義の冒頭では、国連の人口統計に依拠すれば、世界のイスラム人口は4人に1人がイスラムと言っても過言ではないことや、アジアとアフリカの2地域だけで、世界のイスラム人口の約97%を占め、イスラムが多様であることが話された。講師からは、講義前の受講生による発表の中で挙げられた「オーストラリアではなぜイスラームが拡大しなかったか」という疑問に答え、オーストラリ



写真3-4 研究者による講義と学生との対話（国立民族学博物館 2024年6月8日）

アでも19世紀に英国植民地下の今日のパキスタンやアフガニスタン周辺からラクダとラクダ乗りがオーストラリアに連れてこられ、地形の調査や開拓の一端を担った歴史があり、そのためアデレードには現在もそうしたラクダ乗りの子孫のコミュニティが存在することなど、受講生が展示観覧の中で抱いた疑問についても、各所で応答を織り込みながら講義は進んだ。

みんぱっくと同梱資料の傾向を踏まえ、講義では主に食と服装に焦点が当てられた。いずれも受講生たちがこれまでに抱いてきたようなムスリムの暮らしに関する画一的なイメージがほんの一端に過ぎず、現代社会を生きる極めて多様なムスリムの在り様が、豊富なフィールド写真や印象的な動画から説明された。例えば、イランで人気のあるファストフード店のハンバーガーやピザ、アルコールフリーのカクテル、コーヒーショップの流行など、受講生にも馴染みのある食文化が紹介された。先に受講生から挙がった「日本ではハラール食品が少ないため3食同じ料理になりそう」という感想に対しては、ムスリムはハラールフードだけを食べなければならないという誤解を解き、イスラーム法で禁じられていない食べ物は口にすることができ、むしろ豚肉のように明確に禁じられた「ハラーム（禁じられた）」食品の方が少ないことへの言及があった。受講生が展示で着目した菓子（コアラのマーチ）にも言及し、多国籍企業がムスリムの多く暮らす国や地域に進出する場合、ムスリムにとっての食の安全を保証するのがハラール認証マークであることなどが説明された。

受講生の関心が高い服装に関する話題として、ムスリムの社会変化をイラン女性の1910年代から2010年代までの100年の服装変化から捉えたショート動画が紹介された。ムスリム女性の頭髪を隠す慣習は、『コーラン』に記された「美しい所を隠しなさい」という教えに基づく。社会の近代化が進行した1920年代から1970年代までは頭髪を隠さず、他方1980年代からは再び隠すようになり、その背後には70年代からの伝統的・宗教的な文化復興の動向が関係していることへの解説があった。近年のイラン女性の自由意思を訴

える解放運動や、現代の煌びやかなイランのショッピングモールの動画から、「人の暮らしが変われば、その服装も同じ様になっていく」という研究者の言葉に、頷く受講生も多かった。

講義最後には、日本社会でも観光目的の訪日ムスリムや、インドネシアからの技能実習生など滞日ムスリムの増加によって、ムスリムとも無縁ではないことが指摘された。講義を通して、終始、ムスリムに対する画一的な他者表象を払拭するかのようになり、服装一つをとっても地域や時代、現代を生きるさまざまな環境の人々によって多面性があることが強調された。そして、今後博物館実習展を開催する受講生に向けて、「イスラームに関する展示をすること＝近くの誰かを表象すること」であり、「現代の日本人の暮らし、とした場合を想像してみてください」という助言があった。他者表象や異文化表象をめぐる、他人事ではなく、一度自分事に置き換えて考えてみるというプロセスに、納得した受講生たちも多かった。

学生と研究者との対話では、展示観覧後の感想や疑問に対する応答に長い時間が費やされた。「携帯用敷物など荷物が多くて不便そう」という前述の感想には、実施に普段も歩く人は少なく、お土産や記念品で贈ることが多いという回答や、「アパレル大手企業が宗教に参入しないのはなぜか」という疑問には、ユニクロが東南アジアのムスリム女性向けにエアリズムのベールが販売されている事実や、そのほか、手型の邪視除けのお守りや、世俗化が起こって一時は忘れ去られた涙壺についても詳細な説明がなされた。

受講生から新たな質問も生まれ、「お祈りの回数を数える数珠について、現在も実際に使われるのか」という質問には、現在も使われ、本来の用途だけではなく、手遊びのように片手間に使われることもあり、33を3倍にして最後にアッラーも加えて完璧な100となることに意味がある旨が説明された。礼拝カウンターを事前に調べ、現在はスマートフォンのアプリが存在すると発言する受講生もいた。そこから礼拝方法の説明や、その回数や時間に話題が移った。礼拝を知らせるアザーンの話から、手術中や運転中に礼拝の時間になった場合は後で埋め合わせをするなど、イスラームの具体的な実践の話が聴ける機会となった。そのほかにも、イスラーム関連資料にみられる独特の絵柄についての質問から、幾何学模様や文字を模様のように描くのは、神が創造したものを具象化することを禁ずるイスラームの教えに基づくことや、そこから話題が発展して、宗教行事であるラマダンや、イスラームにおける土葬や最後の審判、キリスト教やユダヤ教とイスラームの歴史的展開など幅広く話が膨らんでいった。

受講生を代表して感想を述べた3名は、ムスリムの暮らしについては、「みんなづくりに同梱されている資料だけに注目してこれまで考えていたが、実際に展示観覧や講義を通して、多様なあり方が知れた」という感想や、「制約が多過ぎるといった固定概念をムスリムに持ち、そうした側面ばかりに目が入っていたことに気づいた」という指摘もあった。

使用したアクティビティ・カードに関しても、展示で見た資料について自分の考えを文字で書き、整理することのできるツールであると評価する意見もあった。そして今後手がける展示に関しては、固定イメージに捉われず、現実にはもっと砕けている部分も展示に活かしたいという展望や、馴染みのない資料はキャプションに書かれた文字を読むよりも、モノを見て感じる方が最初の入口として良いのではないか、という投げかけもあった。

こうした民博の研究者による講義とその後の対話は、受講生たちにとって、展示観覧時に抱いた関心や疑問について、即座に専門家の解説を受けることが可能な、またとない機会であったと言える。しかしながら、今回の講義の実現は協働教育プログラムとしての非常に例外的な事例であり、大学での授業利用時の大部分の場合は、学生が展示観覧時に抱いた関心や疑問については、個人が情報検索を行ってさらなる情報を得て、探究的な学びに繋げる必要があるだろう。そうした際に、本館展示場の探究ひろば（情報展示）に設置されている「リサーチデスク」を活用することによって、当該資料の詳細や複数資料の比較、また資料について言及した論文・雑誌記事や関連する視聴覚資料の情報を得ることもできる。そしてさらに検索した情報を基盤に、図書室での書誌の閲覧や、ビデオテークブースでの視聴覚資料の利用にも繋げることが可能である。

4. 民博文化資源の複合的利活用による学びの効果（Ⅲ事後活動）

民博での協働教育プログラムを終え、学習の2本柱としてきた「ムスリムの暮らしに関する知識・理解を深める」「みんぱくの展示方法について観察する」について、受講生は臨地授業日誌の課題レポートとして各自がまとめた。本稿では、それらの学習のねらいに関して検証を行い、その上で受講生が2024年12月に開催した「博物館実習展」から、民博の文化資源の複合的利活用によって、どのような教育的効果が生まれたのか考察する。

4-1 協働教育プログラムにおける2つの学習のねらいに関する検証

民博でのプログラム終了直後に、受講生に向けてGoogle フォームを用いた簡易アンケートを実施した。これは、本書第2章で言及した社会連携WGが大学教員を対象に、民博文化資源の複合的利用に関する調査を目的としたアンケートである。その質問項目を流用したため、以下では受講生に関係する設問のみを抜粋する。

利用後の満足度を問う設問には13名が回答し、全員が「とても満足している」を選択した。「利用によって学びが深まりましたか」という設問には、12名が「とても深まった」、1名が「どちらかという深まった」と回答した。設問「民博の利用後、変化はありましたか」（複数選択可）には12名が回答し、「異文化への興味」の選択が8名、「多様

性への理解」「学習へのモチベーション」の選択が各7名であった。自由記述の回答では、事前に情報を得た上で実物資料を見たり、解説を聴いたりすることで興味や関心が高まったという感想や、講義によって展示とは異なる視点で資料を多角的に知ることができ、展示に込められた思いの強さや一つ一つの資料の重要性を学ぶことができたという記述もあった。

受講生の課題レポートでは、ムスリムの暮らしについての学びとして、学生の多くは次の点を指摘していた。それは、自らが抱えてきたムスリムやイスラームの実践が非常にステレオタイプなイメージで、どこか他人事で型にはめたものであったことへの気付きである。展示場の観覧では、世界のさまざまな国・地域に顕在するムスリムの人々やイスラームの実践の多様性や、実際に自分たちの世代にも身近なムスリム関連資料に触れたこと、また最後に研究者が受講生に向けて「イスラームに関する展示をすること＝近くの誰かを表象すること」であり、「現代の日本人の暮らしとした場合を想像してみてください」という助言が彼女らに強く影響を与えたことがわかった。以下、2名のレポートから抜粋する。

今回のレクチャーを聞いて改めてムスリムへの理解が深まったと感じました。多様化するムスリムについてあまり上手く理解出来ておらず、国や地域、人々によって異なる姿や解釈を持っていることへ疑問を感じていたのですが、元々あった宗教的概念が各地域の土着の信仰と混ざりあいながら変化していったことを教えていただきとても納得出来ました。イスラム教の信仰なので人々の価値観によって大きく解釈が異なってくること、大前提に「宗教」であることを分かったつもりではいたのですが、チャードルやヒジャブといった頭を覆い隠すムスリム特有の姿とムスリム言語であるアラビア語がユニフォームのような役割を果たし私自身、ムスリムを一つの国のような集合体であると捉えていたのだと感じました。自分自身が信仰している仏教ですら、中国やタイなど各国によってさまざまな解釈があり、袈裟などありとあらゆる装いがあり、日本国内ですら宗派によって解釈が異なる多様な宗教観を持っていることを理解していたにもかかわらず、イスラム教をどこか国のように感じていたのは、他宗教について考えることがあまりなく、どこか自分たちとは違うものとして考えていたからだと感じました。髪を隠した姿をムスリムの記号として捉え、固定概念や先入観を持ってしまっていたのだと改めて実感しました。人々が何を思い、何を考えながら生活しているのか、もっと柔軟に物事を捉える必要があると強く感じました。また、土着というキーワードで自分自身の理解が深まったのは自分の身近にある仏教がそうであったからです。宗教というさまざまな価値観を1度自分事として捉えることが大切だと考えました。

黒田先生のレクチャーの中で最も興味深かったのは、イスラム教徒の中でも生活における信仰の取り入れ方にグラデーションがある、という点である。他の宗教でも同じく多様な信仰の形があることは認識しているつもりでも、自分を含め周囲に宗教を信仰している人がいない場合、どうしても宗教ごとにステレオタイプなイメージを持ってしまいがちである。そのため、服装やお祈りの頻度、また食事においても人それぞれ気にする基準が異なるというお話が印象深かった。また、そうした個人の価値観を詮索することもよくないとされていることを知り、自分の中にあるイスラム教徒の捉え方が柔軟に、良い意味で曖昧になったように感じられたの

である。ムスリム女性≡肌を一切露出してはいけない、ムスリムの食事≡ハラールフードなのだ。ひとりひとり背景が異なる人間を宗教一つでわかりやすい記号に当てはめることは、敬意に欠ける行為といえる。人の数だけ信仰の在り方、聖書の解釈の仕方がある。これらは宗教を学ぶ中で最も重要な点であると考えた。

受講生の課題レポートでは、学習のもう一つのねらいであった展示方法についても、さまざまな発見があったことが窺える。複数の受講生が着目していたのは、資料の壁掛け展示であった。見慣れた衣服などは、壁面へ平坦な状態で吊るす方法によって、布自体の形状や大きさが伝わり、知ったつもりでいた資料も別の見方によって新たな気づきや興味が生まれるのではないかと指摘する受講生もいた。また展示解説への言及も目立った。民博の解説パネルは200字程度の解説文からなり、資料そのものを観察するために情報量を抑えていることや、来館者が関心を寄せた資料を自身で調べられるように二次元QRコードが設置されていることに興味を抱いていた。教育普及の側面から、受講生が実際に使用したアクティビティ・カードに対して、実際に使って体験することで、一つの資料をじっくり鑑賞して、そこから何を感じとり考えたのか、想像力を働かせることの楽しさに言及するものもあった。興味深いことは、「来館者が、ムスリムの暮らしについて楽しみながら学習することができ、想像力を働かせるようなものを作りたい」と、全ての受講生が、自分たちが今後手掛ける展示にいかに関与できるのか、応用できる工夫はないかと、主体的に学ぶ意思をもって、取り組んでいる姿勢が彼女らの言葉から窺い知れることである。以下、一部抜粋する。

展示企画を意識しながら展示を回っていると、展示の意図によって見せ方を工夫していることに気づくことができた。例えば大きい資料は大きい資料同士を隣り合わせて、小さい資料は小さい資料で集めて並べることで誘目性が均等になっていると考えた。また、生活の様子を再現する資料はあえて整列させず、生活感のある配置で空間設計をしていた。展示の意図によって資料がよく見えるように置かれたり、そうでなかったりして展示と陳列の違いを実感することができた。実習展の展示でも、とりあえずここに置くとかでなく一つ一つの資料に目的を持って展示することを考えたい。もう一つは研究をするときに、資料のことばかり調べるのではなく、現代のムスリムの様子や資料が実際にどのように使われているのかをインターネットや動画資料、本、論文などから広い目線で情報を集めるべきだと考えた。今回レクチャーを聞いている中で、みんなの資料には書いていないムスリムの文化や現代の様子を知ることができた。そのとき今までみんなの資料だけを見てそれが全てであるように捉えて、考えや発想が狭くなっていったことに気がついた。せっかく私たちだけの企画で展示ができるからこそ、もっと外部の情報を取り込んでより豊かな発想や視点でムスリムの暮らしについて伝えられる展示がしたいと考えた。

上記の後半部分（下線部）において、民博に来館するまでは、みんなのモノ情報カードに掲載された資料写真やそこに記載された情報という、モノとしての資料研究が中心であったものの、そこから発展して、そうした資料を使う現在の生身の人々やその

暮らしへと視野が広がっていることがわかる。同時に、みんなの資料にとどまらず、その他の情報も得る必要性や、「自分たちの発想や視点」に基づく展示への思いが高まっている。協働教育プログラムが目指したのは、まさにこうした20歳前後の受講生ならではの、主体的で探究的な学びであり、その学びの発信である。当初はムスリムについての知識がない状態から、いかに最終的な展示まで手掛けられるのかという不安もあった受講生達であるが、彼女達の発想や視点に基づいた展示を、この半年後に「博物館実習展」として発信するのである。

4-2 みんなをを活用した「博物館実習展」と主体的・探究的な学びの萌芽

受講生たちによる「おいのりせいかつ」展（資料3-7）は、甲南女子大学文学部メディア表現学科が学科内外にメディアの可能性を紹介するために例年実施している「メディア祭」と学芸員課程の博物館実習展のコラボ企画として、2024年12月2日～12月6日の5日間、同大学8号館1階メディア表現学科メディアラボで開催された。期間中には、同大学の学生・教職員を中心に146名が展示を観覧した。社会連携WGは、終了直後の12月7日に展示の観覧および受講生へのインタビュー調査を行った。

入口の案内パネルには、「おいのりせいかつ展は、ムスリムの暮らしを身近に感じていただくためにショップを模した展示会の構成となっています」と記され、ショップの店頭のように中央に置かれた木製什器や、壁面など会場全体に「世界のムスリムの暮らし2：同時代を生きる」の資料が賑やかに展示されていた。同展は、前述した「メディア祭」のゲストとして招聘された建築家・片田友樹氏によって空間設計がなされ、木製の展示什器や3Dプリンターを用いたヘッドマネキン、壁面の展示棚などは、片田氏が同展のために制作したものである。同氏によるレクチャーやヒアリングを通して、「空間」も展示テーマを伝えるための一つの「メディア」だという理解を得た受講生たちが、ムスリムの暮らしの身近さを伝えるためにショップを模した展示を目指して構成された。壁一面にハラールフードや関連資料を配置したセクションでは、「イスラムの教えでは神に許されたものを『ハラール』、禁じられたものを『ハラム』と呼び、ムスリム（イスラム教徒の人々）の生活全般の指標となっています。中でも、ムスリムの人々が安心して食べることができるように認証された食品を『ハラールフード』と言います。口にすることを厳しく制限しているムスリムの人々にとってハラールフードは大事なものです。それらを瞬時に見分けるため、ハラールマークが付けられています。」と書かれた解説パネルを設置し、ハラム食品やハラール認証マークに関する解説も付されている。実際に試食した食品の感想や、日本では「業務スーパー」に比較的多くハラール食品が販売されている等、受講生が実体験した感想が組み込まれていることも特徴である。そして「いのり」「女性アイテム」「日用品」のセクションへとつづいていく。



資料3-7 2024年度博物館実習展×第15回メディア祭
「あいのりせいかつ」ポスター (左) とチラシ (右) (甲南女子大学提供)

「あいのりせいかつ」展の展示方法には、受講生が民博での展示観覧時に得た気づきが、さまざまな箇所でも反映されていた。例えば、小物を均等に壁面に配置して誘目性を意識した点 (写真3-5、写真3-6) や、衣服はマネキン着用展示と同時に、ハンガーに吊るして生活感を醸し出す配置に設計されていた点 (写真3-7)、礼拝用敷物が高い目線で見られるように天井から吊るされていた点 (写真3-8) などである。民博の展示観覧時に得た発見が、彼女らの展示に「生きた学び」として各所に表出していたことは、社会連携WGにとっても非常に大きな喜びであった。振り返りでは、ショップを模した展示場であれば、衣装を気軽に着用できる仕組みがあっても良かった、という意見も挙がった。

また体験型展示の仕掛けとして「あいのりあいてむカード」(資料3-8)を作成し、来場者が展示を通してカードを集め、もち帰ることのできる仕組みも、受講生が生んだユニークなアイデアであった。その説明について、案内パネルでは以下のように記される。

実際に本展覧会を通してお買い物体験をしていただくために、あいのりあいてむカードをご用意しました。全6種類を各種1枚ずつ(最大6枚)お持ち帰りいただけます。付属のカゴを用意しているので、それぞれ好きなカードを入れてショッピング体験をお楽しみ下さい。セレクトされた展示物のちょっとした知識と私たちの問いかけをぜひお持ち帰り下さい。



写真3-5 2024年度博物館実習展 (甲南女子大学提供)



写真3-6 2024年度博物館実習展 (甲南女子大学提供)



写真3-7 2024年度博物館実習展 (甲南女子大学提供)



写真3-8 ショップを模した展示構成 (甲南女子大学 2024年12月7日)



写真3-9 ハラルフードに関する展示 (甲南女子大学 2024年12月7日)



資料3-8 受講生が作成した6種のカード 左が表面、右が裏面（甲南女子大学提供）

この6種類のカード「ベール（中国）」「数珠（マレーシア）」「ハラール食品（中国）」「女子中学生制服（インドネシア）」「アイシャドウ（パキスタン）」「ファッション雑誌（マレーシア、イラン、インドネシア）」の裏面には、短い解説文と同時に、最後に来場者に問かける一文が、以下のように付されている。

〈ハラール食品〉

ハラールは、イスラームの教えで許された原材料を使って作られた食品で、代表的に禁止されているのは豚肉やアルコールなど。人によってその厳格さや範囲は異なるよ！
今日あなたが食べたご飯はハラールだった？

〈ベール〉

ムスリムでは、女性の美しいところは隠すことが望ましいとされ、頭髪を覆うベールが使用されている。着用の規制は国によってさまざまだよ！
もしあなたが着用するなら、どんな柄や色のベールをつけてみたい？

こうした最後の一文は、受講生自身が民博来館時に、それまでのムスリムやイスラームの実践に対する画一的かつ他人事で、型に嵌めたイメージであったことへの気づきや、研究者が受講生に向けた助言、つまり他者表象の問題とも関連している。受講生なりの「他人事ではなく、一度、自分事として捉えてみる」という学びから生まれたアイデアであろう。実際に、来場者のアンケートにおいても、戒律が厳しいというムスリムのイメージが変わった、ムスリムの暮らしが自分たちの生活と遠いものではないことがわかった、といった感想も複数みられた。

受講生への振り返りのインタビューでは、展示においてムスリムに関する解説をもう少し加えた方が良かったという反省点や、ムスリムの生活の中に祈りがあることを示し

つつも、ショップを模した展示方法によってカードを来場者が選ぶことができ、体験的行為・自分事としての目線を創出したかったという感想が挙がった。みんなのモノ情報カードを発端として、受講生によるプレゼンテーションから始まったこの一連の協働教育プログラムに関しても、受講生の感じ方にどのような変化が生じ、どのように理解・探究の程度やプロセスが広がっていたかについて重要な発言が多い。以下に抜粋する。

本当にその宗教について何も知らないから、そうした方々が何を思っているのか、何もわからない状態だったので、不安みたいなものがあったのと、前提の理解がない状態から展示を行うということだったので、ムスリムの展示を行うことによって、信仰している方々を不快にさせたりしないかだったりとか、その自分たちの勝手な憶測とか思い込みで間違った情報を発信しないかみたいところが、すごく不安だったので、今でこそしっかり理解できているとはまだ思えてはいないんですけども、自分たちがわかる範囲で宗教に対する理解でやってきました。みんなだけでは展示までやるのは不安でした。うん、(民博で研究者の)お話をうかがったのも、実際に民博で資料を見たのも、イスラム教とは何かについて、個人的にはすごい理解を深めることができた。実際にそれを専門に学んでいらっしゃる方の中立的な立場からそのお話をうかがえたのは、信仰していない人と信仰している人での解釈の違いもきっとあると思うんですけども、よりその中立的な立場からお話をうかがうことができたので、何が正しくて何が正しくないか教養として学ぶことができました。

宗教って『括り』だと思ったのが一番面白いなと思ったのがスタートで、そこでも知らないことがたくさんあって、例えば、日本でもムスリムの化粧品を作っている会社があるとか、そういうことも全然知らなくて。最初はプレゼンのために調べるためだったんですけど、だんだん普通にそれが授業のためというより、自分が面白いなと思ったから調べるとか、自分の気持ちになっていって、それで今展示まで結びついています。

上記の発言から、授業のために知識を得ることが当初の動機であったものの、次第に個人の知的探究へと変化していったことがわかる。その上で探究方法も資料や文献だけではなく、受講生たちに馴染みの深いインスタグラムといったSNSを活用していることも特徴である。同世代のムスリム女性達が発信する投稿にアクセスし、どのようなベールの巻き方やファッションをしているのか、どのようなことに興味をもち、どのような「推し活」をしているのか、そうしたツールを活用して個々の事例を知ることによって、自分により身近な存在として感じられるようになったと話す。資料3-7のチラシやポスターのイラスト画も、そうした受講生が現代の同世代のムスリム女性たちをリサーチした成果と言える。

またSNSでの調査だけではなく、実際にハラール食品の試食をしたことは多くの受講生にとって、印象深い経験であったという。受講生は滞日ムスリムの増加や輸入品のハラール食品が普段から通う業務スーパーや輸入食品店にも豊富に販売されていることへの気づき、食文化による味付けの多様性、ムスリムの食に対する固定概念の払拭など、

主体的・体験的に活動することで、多面的な発見や学びがあった。これらは、以下の受講生同士の対話から見えてくる。

Aさん：あれだめ、これだめ、それだめって全部ダメなのかなって勝手に思っていたけど、普通にお菓子があつたり、スープとか実際お料理とかがあつたりで、だめなものってかなり限られているんだな、食べていいものも結構あるんだなあっていうのを実際すごく思いました。食べたからだけだね。業務スーパーに元々ハラル食品を沢山取り揃えているっていうのをその公式が出していて、じゃあ業務スーパー見てみようっていうことで行ったら、本当にいろんな国から直輸入されているものがほとんどなので、その中にハラル食品もたくさんあって、甘いお菓子、クッキーだったり、ビスケットサンドだったり、あとカフェインも平気なんだってわかりました。実際に食べたクラムチャウダーに関しては、普通だったら生クリームとか牛乳とかが使われるはずなんですけど、食べたハラル食品には入っていないくて、なのにちゃんとクラムチャウダーの味はしているから、よく考えて食べられるように作られて、みんな安心できるようにされている。あとドライフルーツとかも沢山あって、豊富だなあというのが第一印象ではありました。(中略)ちゃんと色んなものを食べて、色んなものを楽しめる生活なんだなって。めっちゃ上から目線になっちゃったけど、そういう風にイメージはガラッと変わりました。ああ、楽しかった。

Bさん：実際に海外に行って買った食べ物と日本に輸入されて食べるものとじゃ、味付けがほとんど違う感じになってさ。

Cさん：そのハラルマークのものをわざわざそこに日本に居るムスリムの人たちだけに輸入してるんじゃないくて、日本人でもこの食品を食べれるようになっていうふうにはちゃんと考えて輸入されているのかなと。

質問：もしムスリムの方と今後出会う機会があつたら、どう接しますか？

Dさん：バイト先が、大阪で焼き鳥屋さんをやってるんですけど、たまに、鶏肉だからムスリムの方がいらっちゃって、「これはハラルですか？」っていうふうにかかれることがあるんですけど、でもやっぱり焼き鳥ってタレにはアルコールが入っていますよね、だから「それは、大丈夫ですか？」っていうふうに分身の中ですごい確認をして、ちょっと知識がついたなって。

特に最後の受講生の発言は普段のアルバイト先の一場面過ぎないが、重要なのは「博物館実習」を通して得た知識を実社会の中で異文化の人々やその文化に敬意を示し、得た知識を生きた学びとして生かしていることである。実際に、担当教員によれば、昨年度の様子と比べても、受講生の主体性や資料調査に対する意欲は、今年度大きく向上したという。次項では、「博物館実習」担当教員の松永亮太が、教員の視点から民博文化資源の利活用について考察する。

5. 大学教員の視点：博物館実習における民博文化資源の活用とその意義

本節では、博物館実習における民博文化資源の活用について大学教員の視点から論じる。

甲南女子大学の博物館実習では、「1.資料の保存に必要な知識を基に、資料を適切に取り扱うこと」、「2.資料の展示・企画や教育普及の手法を身につけること」を到達目標に掲げており、今年度は資料の取り扱いを中心に調査研究、情報発信、教育普及など学芸員の業務を総合的に学べる展示演習を軸とした授業計画を立てた。

一般的に博物館での展示は資料の収集と選定に十分な時間をかけるが、授業期間内に企画から展示までを行うため、あらかじめ研究者によってテーマごとに資料がまとめられている貸出用学習キット「みんぱっく」を活用した。本学のように博物館をもたない大学でも体系立った実物資料を使用でき、実践的な展示演習の実施に大変役立った。展示演習に実物資料を用いる利点は、資料を丁寧かつ安全に扱う意識を身につけられることにある。雑誌やメイク道具のように普段何気なく触れている物品も、博物館資料として展示前後に詳細な状態調査を行い（写真3-10）、設置の際にはテグスやミュージアムジェルを用いて落下・盗難防止措置を施す（写真3-11）など細心の注意を払って展示を行った。みんぱっくに含まれる資料は材質や形状がさまざまであり、現場での応用力が鍛えられるため、学芸員課程の集大成である博物館実習に適した教材と言えるだろう。

また、民博文化資源は歴史性や希少性などの価値に限らず、同時代の多様な文化を伝える資料が含まれていることが特徴である。今年度実施した博物館実習展「おいのりせいかつ」は、受講生がみんぱっく「世界のムスリムのくらし2：同時代を生きる」を通して、馴染みのある食品や美容への意識など、異文化の中に同世代の身近さを発見したことから物販店をイメージした構成に仕上げられた。来場者からは展示物が本物の博物館資料だということに驚きの反応があった一方で、来場者アンケートでは「民博に興味



写真3-10 展示前の資料の状態調査（松永亮太撮影）



写真3-11 テグスを用いた資料の固定（松永亮太撮影）

をもった」という回答が97%を占め、博物館が専門知識を要する場所ではなく誰でも気軽に楽しめる場所だという認識へと繋げられた。民博文化資源を教材として活用することで、博物館や学芸員の社会的役割についても理解を深めることができ、充実した博物館実習となった。

小括：民博文化資源の複合的利活用と主体的・探究的な「生きた学び」

本章では、2024年度に実施した甲南女子大学の授業「博物館実習」と民博の社会連携WGとの協働教育プログラムから、第一に民博の文化資源をいかに複合させて大学授業「博物館実習」に利活用可能か（複合的利活用による教育モデルの構築）、第二に民博の文化資源の複合的利活用がどのような教育的効果を生むのか、これらを検証してきた。

冒頭で述べた通り、みんぱっくの2023年度における大学での利用は30件前後にとどまり、大学授業での展示場の利用は2023年度が111件、2,913人であった（国立民族学博物館編 2025）。これは展示場の授業利用申請、すなわち教員同伴の授業で展示場を利用する場合に、事前申請によって観覧料が無料となる民博の制度であるが、これを利用した件数を示している。その111件の内、「博物館実習」で来館したのは、3件である。したがって、「博物館実習」での民博の利用は、みんぱっくだけではなく展示場の利用においても、高等教育機関にさらなる周知を行い、利用の促進を図ることが課題であるとわかる。こうした現状を鑑みると、甲南女子大学の同授業の事例は極めて先駆けであり、実際に授業担当教員が言及していたように、博物館・資料館を有さない大学では、みんぱっくは「博物館実習」における資料の取り扱いや展示を実践的に学ぶ有効なツールとなり、展示観覧や学習メディアなどさまざまな民博の文化資源を複合的に授業に組み込むことが可能である。

「民博の文化資源をいかに複合させて大学授業『博物館実習』に利活用可能か」という第一の問題については、甲南女子大学の事例を踏まえ、他大学の「博物館実習」でも応用可能な、民博文化資源の複合利活用した教育モデルを提案したい。図表3-3は、「Ⅰ事前活動」「Ⅱ来館時活動」「Ⅲ事後活動」の3段階における民博文化資源の利活用を示したモデル図である。縦軸は時系列、横軸は「民博館内で可能な活動」と「館外でも可能な活動」に2分している。このモデルは甲南女子大学の事例のように、学生たちによる「展覧会の開催＝学びの発信」を最終目標に掲げ、その展示で使用する資料や大きなテーマをみんぱっくを最初に決定することで成立する。「Ⅰ事前活動」では、展示予定の資料やテーマについて、来館することなくオンラインで取得可能な資料「みんぱっくモノ情報カード」や各種ワークシートを利用した資料調査や、「標本資料データベース」等や「みんぱく図書室OPAC」から資料や蔵書の情報検索、貸出やストーリーミング視聴が可能

な視聴覚資料「ビデオテーク」や「みんぱく映像民族誌」の視聴など、さまざまな民博の文化資源が活用可能である。そしてこうした事前活動が、「Ⅱ来館時活動」での探究的な学びに影響する。民博来館時の活動としては、「アクティビティ・カード」や「ワークシート」を用いた展示観覧や、そこで関心や疑問を抱いた資料に関して、本館展示場の探究ひろば（情報展示）に設置されている「リサーチデスク」から、当該資料の詳細や資料の比較、また資料について言及された論文・雑誌記事等や関連する視聴覚資料の情報を得ることが可能である。それら情報をもとにして、さらに図書室やビデオテークブースでの視聴覚資料の利用にも繋げることができる。ここでも「展覧会の開催＝学びの発信」という最終目標があるからこそ、「資料やテーマに関する側面」と「展示方法に関する側面」、両面から展示観覧時の視点や気づき、疑問の発露も促され、学生たちの主体的な学びが新たに萌芽するであろう。そして「Ⅲ事後活動」では、学生たちの興味・関心の広がり即して、民博の資料や視聴覚資料の活用だけにとどまらない、さまざまな探究を生み出し、最終的にみんぱくの資料を用いた「展覧会の開催＝学びの発信」へと繋がっていく。

そして、「民博の文化資源の複合的利活用がどのような教育的効果を生むのか」という第二の問題については、甲南女子大学の事例からも明らかのように、最初に目標を掲げ、それに向けて4月の授業開始時、6月の民博来館時、博物館実習展の開催準備、12月の開催と各段階でさまざまな資料や情報に触れ、そうしたいくつかの機会に民博の文化資源を利活用することで、受講生たちの主体的で探究的な学びが萌芽している。さらには、一連の探究プロセスの中で得た知識や経験が実社会の中で生きた学びとして繋がっている点は注目したい。もちろん、実際の「博物館実習」の毎回授業の中での担当教員による指導が大きく影響していることは言うまでもない。そして、そこに民博の文化資源がツールとして複合的に利活用されることで、主体的・探究的、そして生きた学びを手助けするような教育的資源の可能性を有していることは明らかと言えよう。

日本の教育現場では、「探究」の重要性が叫ばれて久しい。2018年の高等学校学習指導要領の改訂によって、以前の「総合的な学習の時間」は「総合的な探究の時間」へと改称され、探究的な学習がより重視されるようになった。こうした背景には、ソーシャルメディアといった情報技術革新による急激な社会変化や、移民の増加による差別や多文化共生の問題、世界規模で見れば、終焉が見えない国家間や民族の紛争や分断、また環境問題なども山積し、実社会において課題解決型の探究的な学びや異なる他者との協働的な活動の重要性が高まっている。文部科学省（2019）『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総合的な探究の時間編』では、その学習目標について以下のように明文化されている。

「探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生

	館内のみ	館内外
I 事前活動		<ul style="list-style-type: none"> ●民博の資料について事前に調べる <ul style="list-style-type: none"> みんなつくモノ情報カード ワークシート 標本資料データベース等 ●視聴覚資料を事前に視聴する <ul style="list-style-type: none"> みんなく映像民族誌 ●民博の所蔵図書について事前に調べる <ul style="list-style-type: none"> みんなく図書室 OPAC
II 来館時活動	<ul style="list-style-type: none"> ●観覧ツールを用いて展示場を観覧する <ul style="list-style-type: none"> 展示場観覧 アクティビティカード ワークシート ●関心や疑問をもった資料について調べる <ul style="list-style-type: none"> 探究ひろばリサーチデスク 標本資料データベース等 ●視聴覚資料や図書室を利用する <ul style="list-style-type: none"> ビデオテーク みんなく映像民族誌 みんなく図書室 	<p>事前活動が、展示観覧での探究的な学びに影響する</p> <p>甲南女子大学の事例： みんなつく選定のための 受講生プレゼンテーション</p>
III 事後活動	<p>事後活動に展示やワークショップといった学生からの「発信」を加えることによって主体的な学びが生まれる</p> <p>甲南女子大学の事例： みんなつくを使った「展示」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●民博の資料について事後に調べる <ul style="list-style-type: none"> みんなつくモノ情報カード ワークシート 標本資料データベース等 ●視聴覚資料を事後に視聴する <ul style="list-style-type: none"> みんなく映像民族誌 ●一連の学びを学生が発信する <ul style="list-style-type: none"> みんなつく

図表3-3 3段階の活動における民博文化資源の利活用と教育的効果（岡田作図）

き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を次のとおり育成することを旨とする。

- (1) 探究の過程において、課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究の意義や価値を理解するようにする。
- (2) 実社会や実生活と自己との関わりから問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。
- (3) 探究に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う。」(文部科学省 2019: 11)

みんぱくや展示観覧をはじめ、民博のさまざまな文化資源の複合的利活用は、大学授業「博物館実習」をはじめとした高等教育においても、探究を軸とした自発的な学習に極めて有効なツールであると結論づけて本章の結びとする。

謝辞

民博の社会連携 WG との協働教育プログラムに際し、連携を快諾してくださった甲南女子大学の松永亮太氏、中山公子氏に厚く御礼申し上げます。また本館みんぱくを活用した学生視点の素晴らしい博物館実習展を作り上げ、民博からのさまざまなアンケート並びにインタビュー調査にも御協力くださった甲南女子大学「博物館実習」受講者14名に感謝申し上げます。民博での講義を快諾くださった本館の黒田賢治氏、民博の文化資源に関する助言をいただいた山中由里子氏にも厚く御礼申し上げます。

注記

- 1) この博物館実習展については本館 HP の記事「Let's みんぱく!! ―活用例―」に掲載している。https://www.minpaku.ac.jp/teacher/school/minpack/case/konan_wu
- 2) 「モノ情報カード」は、以前は公開していなかったが、学校教員から借用前に同梱資料の内容に関する質問が多く、HP で公開しダウンロード可能な環境を整えた経緯がある。「モノ情報カード」の他にも「トピックシート」「フィールドアルバム」も同梱しており、甲南女子大学の事例ではこれら資料にも豊富な情報が掲載されているため、事前に目を通したかったという感想や公開への要望をいただいたが、写真の肖像権等の問題から公開はしていない。みんぱく「世界のムスリムのくらし2：同時代を生きる」のモノ情報カードは以下である。
<https://www.minpaku.ac.jp/teacher/school/minpack/contents/muslim2>
- 3) 「アクティビティ・カード」<https://www.minpaku.ac.jp/teacher/school/worksheet/activitycard>
- 4) ワークシート「みんぱくを探検しよう！〈イスラーム編〉」こども版・解説版
<https://www.minpaku.ac.jp/teacher/school/worksheet/tanken>
- 5) 「みんぱく映像民族誌」<https://www.minpaku.ac.jp/sharing/database/mneve>
- 6) 「ビデオテーク」<https://htq.minpaku.ac.jp/databases/videotheque/Top.html>

(ウェブサイトは全て2025年8月25日閲覧)

参照文献

稲葉洋子

2008 「HRAFと国立民族学博物館所蔵図書の分類」『情報の科学と技術』58(2): 64-70。

岩谷洋史・本村康哲

2019 「HRAF分類コードにもとづく博物館における情報リソースの提供手法」『じんもんこん2019論文集』（人文科学とコンピュータシンポジウム2019年12月）pp. 191-196, 東京：情報処理学会。

国立民族学博物館編

1988 『文化項目分類（Outline of Cultural Materials）』（国立民族学博物館 翻訳）大阪：国立民族学博物館。

2017 『国立民族学博物館 展示案内』吉田憲司監修，大阪：国立民族学博物館。

2025 『みんぱくファクトブック FACT BOOK 2023』大阪：国立民族学博物館。

<https://www.minpaku.ac.jp/assets/pages/aboutus/opendoor/factbook2023.pdf> (2025年8月25日閲覧)

松澤員子

2006 「第5節 HRAF資料」『国立民族学博物館30年史』pp. 349-352, 大阪：国立民族学博物館。

文部科学省

2019 『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総合的な探究の時間編』文部科学省。

Yamanaka, Yuriko

2022 Dynamics of Religious Objects in and outside Museums: How Material Culture of Islam Is ‘Framed’ in Japan. In E. Franke and R. Jelinek-Menke (eds.) *Handling Religious Things: The Material and the Social in Museums*, pp. 183-200. Hildesheim: Georg Olms Verlag.

参考資料

国立民族学博物館編

2024 『国立民族学博物館 要覧2024』大阪：国立民族学博物館。

小杉泰・黒田賢治・二ツ山達朗

2018 『大学生・社会人のためのイスラーム講座』京都：ナカニシヤ出版。

文化庁・文化審議会第5期博物館部会

2024 「大学における学芸員養成課程の科目のねらいと内容について」（2024年3月25日）

https://www.bunka.go.jp/seisaku/bijutsukan_hakubutsukan/shinko/about/pdf/94072501_01.pdf (2025年8月25日閲覧)